
ポケットモンスター - とある少女の物語 -

雷鳴りの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター - とある少女の物語 -

【Nコード】

N9635P

【作者名】

雷鳴りの

【あらすじ】

* ポケットモンスター^{スペシャル}SPの世界観を元に作っていますが、オリジナルの要素も含みます。アニメの設定も所々あります。ポケスペやアニメの登場人物が出てくるので、原作ファンの方は見ないことをオススメします。

少女はマサラタウンで育ち旅に出る。
しかし、少女にはあるトラウマがあった。
旅に出て、少女は知る、『自分』という人間を。

このお話は少女のカントーを舞台に繰り広げる、少女の壮大な物語（旅）を描いたものである。

*あらすじはシリアスっぽく書かれています、そこまで重いストーリーではありません。

始まりのあいさつ

プロローグ：

―これは大切なものを探す旅。―

―あなたには有（在）りますか？―

―本当に、大切な貴方の居場所が、人が。―

―これはある少女とポケモン達との絆を描いた奇跡の物語・・・―

そして、運命の扉は開かれた・・・

―今、あなたは奇跡の物語の目撃者となる―

：とある研究所

《ぬおゝ！！》

ズンガラガッシャーン！！

・・・・・・・・・・・・・・・・

《・・・まったく年じゃのう。

おお、そうじゃそうじゃ自己紹介せんとな。

わしの名前はオーキド。

みんなからはポケモン博士と慕われておるよ。

まずこの世界について説明しようか。

ポケットモンスターちぢめてポケモン。

この世界に住む不思議な不思議な生き物。

人はポケモン達をペットにしたり、勝負に使ったり・・・そしてわしはこのポケモンの研究をしているというわけだ。

いよいよこれから、君だけの物語の始まりだ！

夢と冒険と！

ポケットモンスターの世界へ君は足を踏み入れることとなる！
なあと最初は皆怖いものだ。

・さあ、物語の始まりだ！・《

t o b e c o n t i n u e d . . .

PM 3:00 マサラタウン郊外の森

ここはマサラタウン。

マサラは汚れなき白、はじまりの色。

そして、すべての始まりの町。

この世界の中でも特に空気のおいしい町で、ポケモン達がマサラタウンにやってくると元気いっぱい走りはじめてしまうほどの、のどかな風景が広がっている。

マサラタウンの郊外には豊かな森が広がっており、ポケモンたちがのびのびと暮らしている。

森の奥を進むとぽっかりとした空間が広がっている。そこは『ポケモン広場』と呼ばれているほど、ポケモンたちで賑わっている。今日も様々なポケモンたちが広場で遊んでいる。

その中心には一人の少女が座っていた。ポケモンたちは少女を取り囲むようにして、周りで楽しそうに踊り始める。そのダンスにあわせて少女は歌いだした。

少女の声は空気を伝い、高く高く澄んだ空に響いていった。まるでその歌が天までの道筋を示しているかのように、ポケモンたちも歌にそうように空を舞う。

暖かい日差しの中、少女の姿は空から舞い降りた天女のようなだった。

「~~~~~・・・今日はこれでおしまいね、また明日遊ぼう！」

陽が暮れかけてきたとき、歌声が止み、少女の綺麗な声が森に響いた。その声を合図にポケモンたちはダンスを止めて、少女にお別れのサインを送りながら自分たちのすみかに帰っていく。ポケモンたちが帰って行くのを笑顔で見届けたあと、少女もマサラタウンに帰っていく。はずだが、少女は笑顔のまま固まった。

「・・・ってあれ、どうやって帰るんだっけ？」

いつも来ている場所のはずであるにも関わらず、この少女は極度の方向音痴であった・・・。

はじめまして、あなたの物語

前回のあらすじ：

少女はマサラタウン郊外の森の中で遊んでいたが、帰り道が分からず森の中をさまよっていた。

「って冷静に解説してる場合じゃない！！早く帰らないと・・・！」

日が暮れかけていたのもつかの間、辺りから陽の光が消え、あるのは真っ暗な森の闇。空を見上げれば星が見えるがそれも微々たるものだ。自分の足元ですら目で確認しずらくなっている。

「うーん・・・どうして私は広場までの道を覚えられないかなー。」

こんなときに・・・私のポケモンがいてくれたら・・・」

溜息のように言葉を漏らして、少女は顔をうつむかせてとぼとぼ道を進んでいく。その顔には先ほどまでの笑顔は見当たらず、あるのはさみしそうな表情だけ。

少女は今年で14歳となる、にも関わらず彼女は自分のポケモンを持っていなかった。通常この世界では10歳になる頃、はじめてポケモンを貰い冒険の旅に出る。しかし、彼女の場合旅に出たくても出れない事情があった。

一つは方向音痴であること（と、少女が勝手に思ってる）。もう一つはあるトラウマを抱えていたためである。

そして、いまだそのトラウマを克服できていないのだ。これでは、ポケモンを貰うことができないし、旅に出ることもできない。

マサラに住む同じ年頃の子どもたちは、皆旅に出てしまい少女は毎

日一人で過ごしていた。否、一日の大半を森にすむポケモンたちとともに過ごしていた。

陽が完全に沈み、月が空高いところまで登ったとき少女はようやく家にたどり着いた。道なき道を通ってきたのか少女の服は草や泥まみれになっている。

なぜか。

確かに、実際少女の家は森から遠いところにはある。が、マサラタウンの道はほとんど直線になっているので旅の人がきても迷うことはめったにない。

いや、ほんとに。

「ただいま！今帰りました・・・」

とりあえず大きな声で帰ってきたことを知らせると、リビングから「おかえりー」と声が聞こえる。そしてリビングのドアが開き、声の主が顔を出す。

「あらーまたそんなに汚して。ほら、早く着替えなさい！テーブルにご飯おいてあるから、ちゃんとたべなさいね」

少女の姿を見るなりテキパキと指示をし、少女をお風呂場へと追いやる。

「・・・今日も遅くなってごめんなさい、おばさん」

お風呂場の扉が閉まる直前に少女の囁くような謝罪の声が聞こえ、おばさんと言われた女性少女の着替えを用意していた手を止めて少し大きな声で言った。

「私はまだ、ピッチピチの29歳だ!!」

しかし、すでに閉まっていた扉の奥からは鼻歌交じりの声が聞こえてくるだけだった。自分の叫びがさら々と無視された女性はひきつった表情のまま少女の着替えをお風呂場の扉の前におき、溜息を付きつつリビングに向かおうと振り返った。その直後リビングの方から笑い声とともに、

「29歳はおばさんじゃないの?」

「さあ・・・」

「仕方ないよ二十歳と三十路^{はたち みそじ}じゃ、かなりの差なんだし。そこは突っ込んでいけないだろ」

という声が聞こえ、女性は無言のまま黒いオーラを発生させながらリビングの中へとはいつて行くのであった。

「はーさっぱりしたー」

少女がお風呂からあがり、リビングに直行すると黒いオーラを携えた女性と委縮した3人の人影があった。少女が訝しげに思ってみてみると、目を丸くして驚いた声をあげた。

「何やってんのおばさん・・・ってスミカ、それにタルメ、カナタ！！どうしてここに！？」

「あつ！！やつときたー久しぶりーメリル」

「もうー遅いよ、メリル。（自称）ピッチピチの29歳に延々と無言の圧力掛けられてたんだかな」

「こら、仮にも育ての親に対してなんていう言い草だ！！」

おばさんとタルメ、おまけに若干ずれた会話で二人の言い合いに入っていくスミカの三人がぎゃいぎゃいと騒いでいるのを少女「メリル」は呆然と見ている。自分の問いに答えてもらえず、何が起こったのか分からないメリルは会話について行けずにいると、

「久しぶり、メリル」

「あつカナタ。久しぶりだね、でもどうしてここに？」

いつの間にか近くにきていたカナタに声をかけられようやく疑問点を口に出す。すると、

「迎えにきたんだよ、メリル」

「えっ？」

カナタの言葉に一瞬固まって思わず聞き返してカナタの顔を見ると、カナタはメリルの目を見ながら口元を少しだけ上にあげて、もう一度言った。

「君を迎えにきたんだ、メルル。マサラを出て、ポケモンと一緒に旅に出よう」

カナタのその言葉にメルルは目を見開いて固まることしかできなかった。そう、『旅に出ること』それ自体がメルルのトラウマとなっていたからである。

- 時は10年前に遡る -

当時メルルは4歳だった。メルルはその頃マサラタウンにはおらず自身もよく分らないところにいた。それも一ヶ所に留まらず色々なところを転々としていた。

なぜ自分は歩いているのか。

ここは何処なのか。

何処に向かえばいいのか。

誰かと一緒にいたのかもしれないし、1人で歩いていたのかもしれない。

曖昧な記憶・・・。

今となつては思い出そうとしても霧^{もや}がかかったように思い出すことができない。

自分が何者であるのか。

何処で産まれたのか。

家族は、友達はあるのだろうか。

何も覚えていない、それが今のメリルには途轍もなく怖いのだ。旅に出れば自分を知っている人に出会えるかもしれないし、その逆もありえる。真実を見ることの恐怖が、ポケモンと一緒に旅に出たい好奇心よりも勝っているのだ。

しかし、曖昧な記憶の中にもはつきりした記憶があった。

ある人物との出会い。

そしてその人がメリルをマサラタウンにまで連れてきてくれたのである。

《・・・君、どうしたんだ？こんなところで何してる・・・？》

《・・・分らない・・・の・・・》

《・・・そんなところにいては凍えてしまう。こっちにきて暖まろう。話はそれからだ》

曖昧な記憶の中で初めて言葉を交わした人物。

メリルを見て最初は訝しげな表情だったが、すぐに柔らかい表情になりメリルを優しく介抱してくれた。

そして、その人から聞いた場所が -

「・・・ル、・・・リル、メリル！」

誰かの声に名前を呼ばれてメリルは反芻していた頭を引き戻した。

「ごめん、カナタ。えつと・・・」

ようやくメリルが反応したことではっとしたのか、カナタは安堵した表情でメリルを見た。

「良かった。迎えにきたと言ったら急に黙り込むから・・・」

「心配かけてごめん」

心配そうな顔をしたカナタに大丈夫と笑顔で返す。そうすると、少し安心したようだった。まだ何か言いたそうな顔を一瞬したが、騒ぎの大きくなってきた3人に、やれやれといった感じに肩をすくませて止めに入る。

カナタが離れていくのを見て、一度目を瞑って今までのことを思いだす。

あの人にマサラに連れて来てもらってから、毎日楽しかった。

帰る場所。

初めて出来た友達。

たくさんポケモンたち。

そしてあの日の約束。

- 4年前広場にて -

メリルをのぞいた3人が旅立つ前日。

4人はいつもの広場に集まり談笑していた。

その時不意にタルメが言い出したのだ。

「なあ、メリル。今旅に出たなくてもいつかは必ず旅に出よう。辛いこといっぱいあるかもしれないけどさ、俺たちが先に世界を見

てきて、お前を迎えにくる！だから、な？」

「タルメの割にいいこというじゃん」

「おまえー・・・せつかく俺が決めてんのにその返答はないだろ！？」

「でも、タルメの言う通りだよ、メリル！私たち絶対迎えにくるか
らそしたら一緒に世界を見て回ろう！！絶対楽しいから！」

「スミカ・・・ありがと。？カナタどうし・・・」

「4年後」

「えっ？」

「4年後に迎えにくる、その時に旅にでるか否かを聞かせてくれれば
いい。俺はメリルの気持ちを大事にしたい」

「カナタ・・・うん分かった」

「つか、カナタめえおいしいとこ持ってきやがってー！」

「タルメがかっこつけてもつかないから、カナタが言ってくれただ
けだと思うよー！」

「スミカお前喧嘩うってんのか！？」

「違うよ！タルメがあんまり可哀想だから、傷つかないように事実
を述べてるだけだよ」

「やっぱり売ってんじゃねーか!!」

- 真実の恐怖に怯えてばかりでは前に進むことができない。

今のこの記憶は曖昧なんかじゃない。

私はもう、あの頃の私じゃない。

目を開けて今いる場所を見つめる。

てんやわんやと騒いでいる大切な人たちの姿を目に焼き付け、ぐつと拳を握る。

- 何のために旅に出るの？

不意にそんな言葉が頭をよぎる。

そんなのもうとつくの前に決まってる。

「私は・・・私を探しに行くんだ」

- 少女、メリルの物語はこうして始まりを告げたのだった。

はじめまして、あなたの物語（後書き）

次回は登場人物紹介ページです！（ちょびつとネタバレあり）

見なくてもいい人は飛ばして読んでもらってもなんら支障はありません。

（＊閑話）登場人物紹介（前書き）

主人公とその仲間たちについて簡単に紹介します！

ただ、ちよつと書きすぎちゃったかな（・・・；）

- ・ネタバレっぽいところあるから見たくない人は見なくてもいいかも・

（＊閑話）登場人物紹介

メリル（♀）（主人公）

出身地：不明

年齢：14歳（仮）

血液型：AB型

趣味：歌を歌うこと、タルメをいじること

好きなポケモンのタイプ：草・電気（主にピカチュウ）

性格：きつぱりさっぱりとしている姉御肌ではあるが、トラウマを持っていてのせいか仲間意識は人一倍強い。14歳までポケモンを持っていたことがないのでバトルセンスはいまいち（ポケモンと遊んでばかりだったから）。けっこうお人好しではあるが面倒ごとに首をつっこみたがるトラブルメーカー。

容姿：ぱつと見はかなり普通の何処にでもいる女の子。髪の色は薄い黄緑色で常にポニーテール。髪の長さは下ろして胸のあたりぐらい。目の色も緑。スカートよりズボンを好んで着ているのでボーイッシュに見られがちだが、可愛いもの大好き。

スミカ（♀）

出身地：マサラタウン

年齢：14歳

血液型：O型

趣味：オカリナを吹くこと

好きなポケモンのタイプ：はがね

性格：ちよつとずれてるドジッ子。語尾に「〜」や「ー」をつけることが多い。タルメ、カナタと一緒に育ったせいかけっこう男勝りの部分がある。メリルとは親友でメリルのことになるのと烈火のごとくすさまじい気を放つ。感情の起伏が激しい。

容姿：誰がどうみても文句なしの美少女。目の色は黒、髪の色は

ピンク。ウェーブがかった髪で肩ぐらいの長さまである。見た目が弱そうなお嬢様（ファンクラブのみが言っている）。服はメリルとは対象にズボンよりキュルツスカートを好んで着る。

カナタ（♂）

出身地：マサラタウン

年齢：14歳

血液型：A型

趣味：お菓子作り（ポケモン用にも作れる）

好きなポケモンのタイプ：特になし（まんべんなく好き）

性格：一見寡黙に見えるが、実は趣味のことになるとおしゃべりになる。そして、かなり鈍い。メリルにのみやられ役的なポジションになるが、それ以外は頼れる保護者。タルメとは親友。

容姿：「美しい」というよりは「カッコイイ」が似合う男の子。

髪の色は茶色がかった黒（太陽が当たると赤茶色っぽくなる）。目の色は茶色。

タルメ（♂）

出身地：マサラタウン

年齢：14歳

血液型：O型

趣味：ポケモンバトル

好きなポケモンのタイプ：氷、ドラゴン

性格：真正正銘のやられ役。ぶっきらぼうで愛想も良くない部分もあるが、人を決して見捨てない。しかし、言葉使いは荒い。まわりをよくみる観察眼に秀でていて、状況判断も的確。バトルセンスは4人の中で一番。実はメチャクチャ優しい。

容姿：顔は整っているが、あまり笑わないので怖いイメージがある。髪と目はともに蒼。

*ここには主要人物のみ紹介しました。物語が進むに連れて、様々な登場人物が出てくるので、その都度あとがきかなんかで紹介していきたいなーと思います。ちょびつとネタバレなんかを含みますので、読んだ人はこんな感じなんだーと流して読んでいってもらえたらいいかと思います。

（＊閑話）登場人物紹介（後書き）

メルル「ようやく主要な登場人物は出たけど、ポケモンたちがいまだに1匹も出てこないってポケモン小説としてどうなのよ」

えっえと・・・

タルメ「確かに、つかメルルはともかく俺らはもう旅に出てんのになんで1匹も出てこねえんだ？」

そっそれは・・・

スミカ「それは作者の文章構成が悪すぎるからだと思うな」

ぐはっ・・・

メルル「なんかダメージ受けてるし、あー早く私も私のポケモン欲しいよ！」

カナタあー助けてーみんなが僕をいじめるううー

カナタ「はあー（↑ため息）・・・ちなみに次回は出てくるのか？」

・・・

「「「じくり・・・」（言っのを待ってる）「「「

・・・ひ・み・っゝ

「「「おい!!」」」

カナタ「・・・はぁー」↑ため息2

それでは次回〴〵お楽しみに、ふふふふV

タルメ「うわ〴〵すっげえ気色わりい・・・」

・・・タルメ後でみてろよ・・・

旅に出る前に

スミカ、カナタ、タルメの突然の帰郷に驚いたものの、仲が良い4人である。

すぐにいつもの雰囲気に戻り、楽しく話していた。どうやら3人もそれぞれで旅をしていたらしいが、マサラに帰る時は一緒に帰ると約束したらしい。

メリルには内緒で。

だが、自分のことを考えて3人が集まってくれたことがメリルには嬉しかった。

彼女たちが今いるところはマサラタウンにある『子どもの家』。

この子どもの家とは、マサラタウンに住んでいる子どもたちがよく遊びにくることからその名がついたらしい。

昔は別の人が住んでいてそう呼ばれていたが、今では（自称）29歳の女性がただ一人で住んでいるだけのなんの変哲もない家であった。

しかし、メリルがきたところからここは彼女たちのたまり場となってしまうた。

メリルがマサラに来た時、彼女を誰の家に住ませるか問題になった。それというのも、メリルを嫌がった訳ではなく、むしろ住民は快く受け入れたのはいいものの、誰の家で育てるかということでもメリルの取り合いとなったのだ。

子どもが大好きな住民ばかりで「私が、私が、」とみんなが手を上げたのだった。

そして彼女の家が決まるまで、当時（自称）19歳だったミナヅキの家で預かることになったのだ。

「あんときあんたを預かるっていう話がきたとき、まさかここまで世話することになるとは思わなかったな」

久しぶりに4人が集まって昔の話をしている時に、メリルがきた時のことを思い出したのか、おばさん「ミナヅキがしみじみと言った。そのつぶやきにくいいたのはタルメである。」

「そついや最初は、メリルを一時的に預かるって話だったんだろ？なのに結局引き取っちゃったから母さんすつごいがっかりしてたし」

「へーじゃー良かったね、メリル！タルメと同じ家にならなくてー」

「おい、こらスミカ。おめえは何が言いたい・・・？」

「そついやおばさん、どうして私を引き取ったの？」

「あーそれ私も聞きたーい！！」

「おばさん言うな！それにあたしは真正正銘29歳だ、年上には敬称をつけてミナヅキさんと呼ばんかい」

どうやらミナヅキは年齢が出るたび、自称と付けられていると感じたらしい。

「なぬ、俺は無視なのか！！？おい！」

最初に食いついていたのに放置されて叫んでいるタルメを放って女性人3人ははしゃぎながら、昔話に突入していた。カナタはいまだに「なぜだー」と唸っているタルメを慰めていたが、その顔には「あきらめろ」と書いてあるようだった。

スミカ、カナタ、タルメの3人は幼なじみで兄妹同然に育った。同じ年の子供が自分たちしかいなかったのので3人はいつも一緒に遊んでいたのだ。

そんなとき、マサラに同じ年の女の子がやってくると聞いて飛び上がって喜んだ（主にスミカが）。

女の子の友達がいなかったスミカにとってメリルが来るという知らせはそのぐらい嬉しかったのだ。

「メリルが来た時、私本当に嬉しかったんだよー！初めて女の子の友達が出来るとあって思ってた！！」

スミカはメリルが来た時のことを思いだしながら弾んだ声で言った。その眩しい笑顔に唸っていたタルメもふつと優しい表情になった。いつも表情の変化が乏しいカナタも少し口の端を上に向けていた。いつも人よりちょっとずれているスミカではあるが、やはり女の子である。今まで1人で旅してきたのだから心細かったんだろうと思うと、久しぶりにスミカの満面の笑顔が見れて二人とも安心していった。

メリルは少し照れくさそうに笑ってから、

「だったらあの人にお礼を言わないとね。私をマサラに連れてきてくれたんだもん」

ときさやくように言った。

ミナヅキには聞こえていたのかしかめ面になり、声には出さないがぶつぶつと口の中で文句を言っているようだった。

ミナヅキの様子がいきなり変わったのでメリルを除いた3人は驚いている（スミカはキョトンとしている）が、メリルだけは苦笑いをしていた。

（毎回思っけど、おばさん本当に仲悪いよなー）

仲良くすればいいのに・・・とは思うが口には出さない。

言っただって変わることなどないことがこの10年でよく分かっているのだから。

（でも、私を引き取ってくれたんだもんきつと歩みよることまできるはずだよな）

頭の中でそんなことを考えていると、スミカにクイクイと服を引っ張られた。

「どうしたの、スミカ？」

「メルル、えつとね・・・」

メルルがクエスチョンマークを頭に浮かべながらスミカを見ているとさっきの笑顔がかき消えて困惑気味の表情になった。スミカは「えつとね、えつとね」と言いよどみ、タルメに助けを求めるように視線を向ける。

その視線を受けて、タルメはちらつとカナタを見て、ため息をついて話します。そのタルメの視線にカナタも同じくクエスチョンマークをつけてメルルと顔を見合わせる。

「あーメルル・・・お前、旅に出るんだよな？」

「うん、出るよ。だって約束だし」

「えっ！！／＼へっ！？」

メリルの返答にタルメは目をひんむいて驚き、スミカは困惑気味の表情から一変輝くような笑顔に変わった。

どうやらさっきのカナタとメリルの会話を聞いてなかったらしく（ミナヅキと言い争いをしていたのだから聞こえるはずもないが）、メリルが旅に出るのか出ないのかずっと気になっていたらしい。

タルメの隣でカナタが納得したように「ああ」と言っている。どうやらカナタはメリルが旅に出るもんだと勝手に確信していたようだった。そう言えば、返ってきた時間くって言ってたっけ、と今更思い返すカナタであった。これではさっきメリルが慌てたのも無理もない話である。だが、カナタの言葉でメリルが旅に出ようと思うようになったことは事実なので、結果オーライということであろう。

「メリルがやけに素直だと、怖いな・・・」

「タルメ、聞こえてるかんね」

タルメのボソツとした呟きを聞きとってにつこりと笑う。
ちなみにメリルの目は笑っていない。

タルメが乾いた笑いで冷や汗をかきながらその場を流そうとしていると、

「ねっメリル！いつ旅に出るの！？オーキド博士のところに最初のポケモン貰いに行かないと！！それから広場のポケモンたちにも行ってきますって言いに行かなきゃー！それからそれから」

隣からスミカのマシンガントークが炸裂した。

メリルが旅に出ると言ったことがよほど嬉しかったのか目がキラキラに光っている。どうやってスミカのトークを止めようかとメリルが考えていると、

「とりあえず、俺たちも帰郷したことだし博士に会いに行こう。メリルもその時もらいに行けばいいよ」

スミカの止まらなそうなマシンガントークをさらりとかわしてカナタが言った。

スミカの思考は半分どっかいていたようだったがカナタの言葉に瞬時に飛びつき、カナタの顔を指さしながら、ビシッと一言。

「カナタっち、ナイスアイデア！！決定、明日4人でオーキド邸に行こう！」

ということになった。しかも良い笑顔つき。

「私／俺の意見はなしですか・・・」

メリルとタルメのハモった呟きが漏れたのは言うまでもない。

「あんたら、いい加減にもう寝な！！とつくに0時回ってんだかね！」

さつきから放置されていたミナヅキの若干年寄り染みた叫びが出たのも言うまでもない。

旅に出る前に（後書き）

タルメが僕をいじめるので、今回はとことんメリルにタルメをいじめてもらいます。

メリル「なんで私？別にかまわないけど」

タルメ「げっ！？きたねえぞ作者！！」

前回の復讐さー

メリル「んじゃ、タルメあっちいこっか」

タルメ「んぎゃー！！」

あんなに笑顔なのに・・・恐ろしい子

それでは次回、お会いしましょう

多分、ポケモンも出てくるよ・・・多分ね！

スミカ「説得力ないなー」

カナタ「・・・」↑肯定

泣

それぞれの準備（前書き）

長らくお待たせしました（・・・・・）

今回は2話分一気にupしました。

では本編をお楽しみください。

それぞれの準備

とりあえず、ミナヅキに言われた通りゆっくりと休む3人。

久しぶりにはしゃいで疲れたのか、それともマサラに帰ってきた安心感&疲労感からか3人とも布団に入った瞬間、寝息が聞こえてきた。

ミナヅキの家は子どもの家と呼ばれていたからなのか部屋数が多く、あと4〜5人増えても泊めることができる。カナタとタルメは同じ部屋で寝ていてスミカはメリルの部屋で寝ている。カナタとタルメが寝たのを確認するとメリルは自分の部屋に戻った。ドアをそーっと開けて部屋に入りスミカが寝ているのを見て、微笑ましい顔で眺めたあとメリルも眠りについた。

- 翌日、早朝 -

静かな朝に似つかわしく、けたたましいアラームが鳴った。それも、

「おはよう朝だよいつまで寝てるの起きないと怒られるよ。おはよう朝だよいつまで寝てるの起きないと怒られるよ。おはよう朝だよいつまで寝てるの起きないと怒られるよ。おはよ……………」

「だああああ————うるせ————」

タルメの叫び声つきというなんとも言い難い、かつ気持ち悪い目覚めとなった。

目覚めが悪いせいか若干目がつり上がっているミナツキ。そのミナツキの作った朝食を食べ終えたメリルがタルメを見て一言。

「何、あの叫び声。ありえないでしょ」

はぁーと盛大にため息までついて言った。そのため息に異議を申し立てるかにようにタルメがカナタを指しながら言う。

「つか、あんな目覚まし使ってるカナタが元凶じゃねえーか!」

タルメの言い分に、

「昔からあれで起きてるから、タルメももう慣れてるかと思っていたが・・・」

指をさされながらも平然と答えるカナタ。その顔には疑問点しか浮かんでいない。相変わらず察しの悪いカナタにかわってスミカが説明する。

「多分ねー4年間も離れて旅してたから忘れてたんだと思うよー」

「・・・そうか、悪かったなタルメ」

そう言いながら謝るカナタにメリルは、

「カナタはそんなに気にしないでいいよ。あの目覚ましじゃなきゃ、起きれないもんね」

と食後のお茶を飲みつつ笑顔で言う。その笑顔は決して嫌味なものではない。スミカもメリルの隣でうんうんと首を縦に揺らしている。メリルの言葉を聞いてカナタは少し照れくさそうな曖昧な表情になった。あまり表情を表に出さないカナタにとってこの表情は嬉しいということなのだ。自分をわかってくれる幼馴染の存在に。それを分かっているメリルとスミカは笑顔である。

「つか、俺を無視して話を進めんな。俺が悪者みたいじゃねーか」
だが、和やかな雰囲気の中に入れないタルメはばつが悪そうにそう言った。

「あつタルメのこと忘れてた」

「メリルてめえ・・・」

「いいからさつさと食べる！！アホんだら！」

メリルのからかい口調にタルメが切り返そうとした瞬間、機嫌の悪いミナツキの怒号が響いたのだった。

ようやく朝食を食べ終わり、各自部屋に戻ってオーキド博士のここに行く準備を始めた。

・カナタ&タルメの部屋

「・・・さっきは悪かったな、カナタ」

部屋に入ってから無言で荷物整理をしていたタルメがようやく重い口を開いた。先ほどカナタに半分当たってしまったことをタルメなりに気にしていたらしい。タルメがあまりにもらしくなく落ち込んでいるように見えたのか若干苦笑い気味の返答が返ってきた。

「大丈夫だ。元はと言えば俺がいつまでもこれに頼ってしまっただけかりいるのが悪いのだから」

カナタのその言い方に、

「何言ってるんだっ！！あれはお前の・・・」

そこまで言っただけでタルメは言葉を切った。後ろを向いているのでカナタの表情は見えないが、見えても表情だけでは何を考えているかなど分からない。いつもそうだ。

きつと今でもあの子を探しているのに。そうあの目覚ましは――

「タルメ」

「・・・なんだよ」

「俺は大丈夫だ。早く準備しないとメリルに怒られるぞ」

「・・・おっ」

何が大丈夫なんだよつと言いたい言葉をタルメはようやく飲み込んだ。事情を知っているがゆえに何もいえず、何もできない自分が齒がゆくて。

メリルの時もそうだ。誰よりも一番近くで守ってやりたいのに、いつも何もできやしない。

「俺は・・・無力だな」

唇を噛みしめながらいうあまりにも小さな呟きは誰にも聞こえることなく消えていった。

ーメリル&スミカの部屋

昨日メリルが旅に出ると言った時からご機嫌な様子のスミカ。今もメリルの隣で準備をしながら鼻歌を歌っている。そのスミカの様子をメリルは苦笑いしていた。

「ねーメリルは最初のポケモン何にするか決めたのー？」

メリルにそう聞きながらスミカはモンスターボールを投げてイーブイを繰り出す。そして慣れた手つきでイーブイの毛づくろいを始めた。

「うーん・・・決まってはいるんだけど・・・ね」

スミカの手つきを見ながらなんともいえない返事を返す。イーブイ

はとても気持ちよさそうにしている。スミカはイーブイの毛づくろいの手を休めることなくメルルに尋ねる。

「なーに、迷ってるのー？」

「ううん、そういう意味じゃないよ。そうだなー博士のどこ行くまでの秘密ってことで」

「えー！？なんでー！」

「まあまあ」

スミカが食いつくのを笑顔でかわしながら、メルルは窓の外を見る。何度もこの日を夢みては目をそむけてきた。それは自分を知ることからも逃げていた。だが、今日は違う。

（私を信じてくれている仲間がいるんだもんきつと大丈夫。私は・・私を信じる）

さっきまでブーブー言っていたスミカだったが、メルルの目線が窓の外のもっと遠くにあることをみて優しい表情になり、おとなしく待っていたイーブイの毛づくろいを再開した。

全員の準備が終わり、メルルたちはミナヅキの家の前に立っていた。このままオーキド博士の研究所までいきポケモンを貰って旅に出る

のだ。メルルは10年間慣れ親しんだ家を見つめて、見送りに出てこないミナヅキ（たぶん、照れ隠し）に向かって大きく息をすった。

「今までお世話になりました！いつてきます、ミナヅキさん！！」

ちよこんと小さくお辞儀をして、後ろの3人を振り返る。そして―

「行こう！博士のそこへ」

笑顔のメルルに合わせるように3人は笑顔でうなづいた。

オーキド研究所までの道のりを4人はのんびり歩いていた。その時メルルが思いだしたように声を出した。

「さつきも疑問に思ってたんだけど、スミカなんでそのイーブイ、ボールに入れないの？」

メルルはスミカが部屋でイーブイの毛づくろいをしてからボールに戻さず連れて歩いていることを不思議そうに眺めている。トレーナーは普通ポケモンをボールに入れて旅をしている。

スミカはメルルの問いに一瞬キョトンとなってから笑って、

「この子はまだマサラに来たことなかったからねーせっかくマサラに帰ってきたんだもんボールの中にいたんじゃないーって思っただの！」

「へー」

「今のトレーナーなんてボールからポケモンをだして連れ歩きして
るやつ多いぜ」

タルメはそう言いながらモンスターボールを投げると、ボールから
はカイリユーが飛び出した。

「リユー」

カイリユーは外に出てこれてうれしいのかタルメのそばには来ず、
空を飛びまわっている。カイリユーを見ながらカナタは感嘆の声を
あげた。

「さすがだな、タルメ。カイリユーは育てるのが難しいと言われて
いるのに」

「まあな」

カナタの素直な賛辞にタルメは照れくさそうに笑う。メリルは下り
てきたカイリユーと戯れていたが、スミカはイーブイを抱きながら、

「タルメ一応私たち3人の中で一番強いしね」

「おいこら、一応じゃねー強いんだっての」

と若干テンポのずれたことを言っていた。タルメもタルメでスミカ
の一応というところが気になったのか強いを強調する。そしてなん
やかんやとスミカとタルメのずれた会話がなされているのを気にも
とめず残り二人は研究所までの道のりを歩くのだった。

――オーキド研究所

「博士！帰ってきましたよー！！」

スミカがドアに突進する勢いで走り、大声を出しながらドアを叩く。スミカの足元ではイーブイがスミカと同じように「ブー！！」と鳴いている。

「・・・スミカのファンクラブがある理由、ちょっと分かった気がする・・・」

スミカとイーブイの姿を見てながらタルメのボソツとした呟きにメルルは目を見開いてタルメにつっかかる。

「えっ！？ファンクラブ！？スミカの！！？」

「あんだよ、けっこうな人数いるって聞いてるぜ」

メルルに腕を捕まれ嫌そうに答えるタルメ。なっ、とカナタに同意を求めると、

「・・・聞いたことはある」

ということらしい。表情が若干曇っているように見えるが、嘘を付くような理由はないので本当に聞いたことはあるのであろう。

カナタにまで言われたら信じるしかないメルル。もう一度、さっきから大声を出して博士を呼びながらドアを叩くスミカに目を向ける。

「は・か・せーオーキドは・か・せー！」

そして目を伏せながら、

「・・・ごめん、私には理解不能だよ」

「スミカを見て、そう言い切れる女はお前ぐらいなんだろうな」

タルメはそう言いつつメリルの手から解放されるべく腕を動かす。メリルはまだ苦渋の顔で悩んでいたのであっさりとタルメの腕を解放した。

確かにスミカは可愛い。10人いたら10全員が美少女と認めるくらい、整った容姿をしている。それはメリルも知っているし、決してスミカを僻んでいる訳でもない。

何故なら、

「・・・だってスミカはスミカでしょ？」

「・・・まーな」

「・・・」↑肯定

スミカをよく知る幼馴染み3人からすれば、スミカがどんなに可愛いからーがスミカはスミカなのだ。それ以上でも以下でもない。メリルの言葉にタルメは、

「そうだよな、スミカなんだよな・・・」

とぶつぶつ言っていた。

幼馴染みというよりも家族と言ったほうが意味的には似ている。家族の中で誰かのファンクラブがあると言われても「何、それ？なんで？」的な感じに思うのと一緒になのである。まあぶっちゃけると近くにすぎた見慣れてしまったというのが正しい。

そんなこんなでメルルたちが色々談義している間にようやく研究所のドアから目的の人物が顔を出した。

「全く、朝から元気じゃのう。お前さんらは」

今まで寝ていたのか目をこすりながら、オーキド博士は言った。

「博士ー!! スミカ、帰ってきたよー!!」

その博士に思いっきり甲高い声で抱きつけば、

「おわーなっなんじゃー!!」

「……倒れるよね／＼」

「……」 ↑ 肯定

画して4人はようやくオーキド研究所に着いたのだった。

オーキド研究所にて（前書き）

この話で旅立ち編完結です。

本編へGO!!

オーキド研究所にて

オーキド研究所の玄関先で盛大にずっとこけてしまったオーキド博士をカナタとタルメはラウンジまで連れていく。その間スミカはメルからたつぷりと説教をくらっていた。

―ラウンジにて

「博士大丈夫ですか？」

カナタが心配そうに聞くと、博士は背中をたたきながら起き上る。

「なあに大丈夫じゃよ。しかし年はとりたくないもんじゃのう」

「無理すんなよな、博士。いくらスミカでも油断してたらどうなるかわかんねーぞ」

「タルメ……それはどういう意味なんだ」

心配そうなカナタとは正反対のタルメの言葉にカナタが若干頬を引きつらせながら言った。そんな二人を見てオーキド博士は朗らかに笑っていた。

「しかし、お前たちも大きくなったのう。中々帰ってこんのだからみんな心配していたんじゃないぞ」

博士は朗らかに笑いながらカナタとタルメを見る。口では心配しているようにも見えるが、表情はそう言っていない。

そこにあるのは『信頼』 -

小さい頃はいつも4人で遊んでいた。だからこそメリルを置いて旅に出ると聞いたときはやはり心配した。
だが、

「博士ー！私たち旅に出る！！そして一回り成長してメリルのこと迎えに来る！！」

「ああ」

「まっそういうこった。つかスミカ俺の台詞とんな！」

いつも一緒だった。4人でいることが当たり前だった。つまり旅に出ることはその当たり前がこれからはなくなること。それでも彼らはこの道を選んだ。誰かに甘えて生きるのではなく、自分一人でも生きていけるように、困っている人に手助けできる自分になるために。

あの日一人ひとりが自分自身に誓いを立てて旅立っていったのだ -

「博士ーごめんなさーい」

ぐずぐずと泣きながら謝るスミカを連れてメリルが戻ってきた。一体どんな説教をされればここまで泣けるのかというほど泣いているスミカであった。その光景を見たカナタとタルメが思わず無言でメリルを見たのは言うまでもない。当のメリルは素知らぬ顔でソファに座ってイーブイの毛づくろいをしている。

「スミカに悪気がないのは分かっておるよ。だからそんなに泣くもんじゃない」

よしよしと目の前で泣くスミカをあやす博士。カナタも心配なのかスミカのほうをしきりに見ているが何か言うことはない。タルメはというと恐ろしいものを見るようにメリルを見ている。

スミカが大分落ち着いた頃、ようやく本題に入った。

「そうじゃお前たち。そろってメリルを連れてここに来たということとは。」

「お察しの通りです、博士。今までお世話になりました」

先ほどまでの素知らぬ顔を一变させて真剣な表情になってメリルが言った。

「私・旅に出ます」

その言葉に迷いはなく、凜とした響きがあった。

博士は何も言わず頭を縦に降った。

「そうかついに行くのかのう」

「はい、それが3人との約束ですし。何より私自身の為にも」

「家族を探しにいくのか？」

「家族・・・というか自分を探しに。私の家族はここにいますから」

「うむ。にしても大きくなったのう、メリル。お前さんが来てからもう10年とは・・・まったくどこで何をやっておるんじゃないかな、わしの孫は」

博士の言葉にメリルは苦笑するしかない。彼はいつだってそうだ。たまにふらっと帰ってきたかと思えば、またすぐにどこかへ行ってしまう。マサラにはもう4年は帰って来てはいないはずだ。

「そういえば3人は旅してる時、グリーンさんには会わなかったの？」

ふと思い出したようにメリルは3人に振り返って聞く。

「あたしは会ってないなー見てもいないかも」

「俺も」

「タルメは？」

さつきから仏頂面をして黙っているタルメにメリルが問いかける。ちらつとこちらを見たかと思えば、ふいつと顔をそむけて若干不貞腐れた声で、

「・・・会ってねーよ」

とそれだけ言っただけ黙ってしまった。メリルが首を傾げて「何あれ・・・」と呟くのを傍らで聞いていた力ナタは心の中でそつと溜息をつくのであった。

「でもさ、メルル。グリーンさんてカントーにいるのー？別の地方に行ってるんじゃないの？だってメルルが小さいころいた場所ってキッサキシティってところでしょー」

スミカの言葉にメルルは自分の記憶を呼び覚ますように目を閉じる。
—あのとき、凍えそうだった私を介抱してくれたグリーンさんは・

「……はい、キッサキシティでの調査が終わり次第そちらに向かいます。ナナカマド博士——」

「……そうなんだけどねー……」

「まあその時、キッサキシティにいたとしても随分前のことだろう」

「あーなるほどおー」

スミカにつられメルルも「そうそう」と同じように頭を縦に揺らしていた。

「さて、メルル。旅に出るのじゃったな最初のポケモンは何にするか決めたのか？」

オーキド博士が咳払いをしてメルルの方を向いた。当初の目的を忘れつつあった4人はあつと今思い出したような顔をしている。

「もちろん決めてきました。最初のポケモンは・フシギダネにします！ー」

「やっぱり〜メルルなら絶対フシギダネにすると考えたー」

メルルの意気揚々とした返事にオーキド博士は満足げにうなずきどれどれと研究室に戻って行った。スミカはイーブイの毛づくろいをしながらにやにやしてメルルを見ている。

「ほんとに草ポケモン好きだよね、メルル」

「えへへーレッドさんもフシギダネだったし！」

「……お前ってホントに先輩たち好きだよな」

「もち！あんなにかっこいい人たちそうそういないじゃん！！」

ねーつとスミカと一緒にうなずきあう。それからもうタルメなど見もせずガールズトークに入っていく。

「……………」

キラキラしながら先輩たちの話をするメルルとスミカを横眼で若干引きつりながら見ているタルメ。カナタはそんな3人を静かに見守っている。こんなことはしょっちゅうである。ふと、カナタが窓の外を見ると青々とした空に暗雲が立ち込めていた。

（……ひと雨来そうだな……）

外を見ながら旅の幸先はあまり楽ではないらしいと3人には気づかれないように溜息ついた。

オーキド研究所から楽しげな声が聞こえてくる。だが彼らはまだ知らずにいたのである。そこからそう遠くないところで『何か』が起

.....

オーキド研究所にて（後書き）

次から新章が始まります。なるべく早く更新いたしますので楽しみにー

メリル「そう言って1年くらいたつに決まってるけどね」

スミカ「作者のサボり癖はもう直らないねー」

君たち！そんなこと言うもんじゃないよ・・・僕だって生きるのに必死なんだ・・・泣

タルメ「・・・どんな崖っぷち人生送ってたよ」

カナタ「ただ単に飽きやすい性格なだけだろうな」

・・・皆で僕をいじめるから今日はこれくらいにしといてやる！！

「・・・・・・・・」

ではまたお会いしましょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9635p/>

ポケットモンスター - とある少女の物語 -

2011年10月5日21時49分発行